

吉田城氏の思い出

高岡 幸一 Koichi TAKAOKA

吉田城氏が大阪大学言語文化部に赴任されたころ、私もまだ若かった。彼は東京生まれの江戸っ子で、学生時代は京都で学ばれたとはいえ、関西、特に大阪の風土とは馴染まない青年であったような印象を私は感じていた。洒落たスーツの着こなしといい、ベレー帽といい、どこかあか抜けのした都会人風であった。そんな彼であって私もたしか初対面のあと「気障っばい兄さんが来た」とやや意識的に彼とは距離を置いていたかもしれない。ところが、こういった先入観が緩和されたのは、彼の奥さんが奈良の天理生まれの関西人であると知ったことからである。

本当はこういった土地柄に関する偏狭な先入観自体厭うべきものではある。という風に年を重ねた今となっては後悔している。奥さんの典子夫人はとてもいい人で、そののち組合の主宰する小旅行などに吉田夫妻も参加された機会などには、色々とお話をしたことがある。ふたりはおしどり夫婦で、阪大の文学部でのガリア研究会にもおふたりで出席されたりもした。あるとき、千里中央と桃山台の中間に位置する新居にフランス語教室の二教授と一緒に三人でお邪魔したときには、典子夫人のお手製で親しく歓迎を受けたこともあった。そのとき吉田城氏から、英文学者の父上、吉田正俊先生著の『西と東の狂言綺語』という一冊を戴いたことを覚えている。

そのころ言文では、新任の先生が来られると、講演会を開きその先生のお話を聞くという会の催しがあった。私の簡単な司会のあと、吉田城氏はパリで仕事してこられたブルーストの草稿研究に関する発表を行われた。今でこそ日本人学者たちによるブルーストの草稿研究は盛んであるが、吉田城氏の緻密な草稿研究はわれわれフランス文学専門家にとっても新鮮であり、刺激的であった。この衝撃はフランス語以外の研究者たちには多分驚きでさえあっただろう。西欧人以外の研究者が海外の図書館に入り浸ってマニユスクリプトに没頭する姿は想像を絶することであっただろう。

またあるときにはこんなエピソードもあった。東京からモンテーニュの研究家の荒木昭二先生が阪大の文学部へ集中講義に来られたとき、言文においても先生を迎え、食事を共にしようという企画が立てられた。この準備係りが当時若手教官の吉田城氏と私とに指名された。ふたりで相談の結果、おでんパーティを準備することとなった。具は適当に買い込めるが、出汁を何にするかふた

りで各店のおばさんに聞き回り、結果的には情報源のアドバイスを全部採用しよう、ということとなり、昆布出汁、鰹出汁、鳥穀出汁、豚肉出汁などなどすべての出汁で調理し、会場のフランス語資料室に運び、荒木先生におもてなしをした。おかげで先生は上機嫌で「これほど美味しい関東煮を食べたことがない」とおっしゃっていただいた。

それからしばらくして吉田城氏は私に「阪大も楽しいところですが、京大でブルーストをやってくれと言われます」と打ち明けた。一瞬残念な思いはしたが、彼の学問を知る者としては転勤する方がいいと直感した。やがて大橋保夫先生がフランス語資料室にお見えになり、われわれスタッフに吉田城氏の割愛願いを申し込まれた。およそこういうところが阪大時代の私の記憶に残る吉田城氏の思い出である。短い期間ではあったがとても素晴らしい人物とおつき合いできたことを喜んでいる。

彼のご病気の噂を聞いたのは京大に移られてから何年か経ってのことであると思う。弟分のように可愛がっていた彼が人工透析などと思うと心が痛んだ。学会などで出逢うと、知らない人に「これが阪大での僕の上司の高岡さんです」と私を紹介してくれる彼の笑顔を見るにつけ、「長生きしろよ」と心で念じた。そのうちまた彼と出逢うと「子供が生まれました」と嬉しそうに語る彼の顔を眺め、次第に病気のことなど忘れがちになっていった。

また京大仏文科の一国一城の主となられた吉田城氏は、学会支部会などでご自分の院生が発表するときには心配そうな顔つきで聴衆に交じり聞き耳を立てられている姿を拝見したりもした。懇親会などでは、顔を会わせると会話の話題は子供さんのことよりその日発表した院生のことでもちきりであった。彼の教育者としての真摯な一面をも垣間みた。

この吉田城氏の病状が芳しくない噂を耳にしたのは昨年のものであり、その秋には訃音に接した。自慢の弟に先立たれた思いである。

(たかおか・こういち 大阪大学名誉教授)